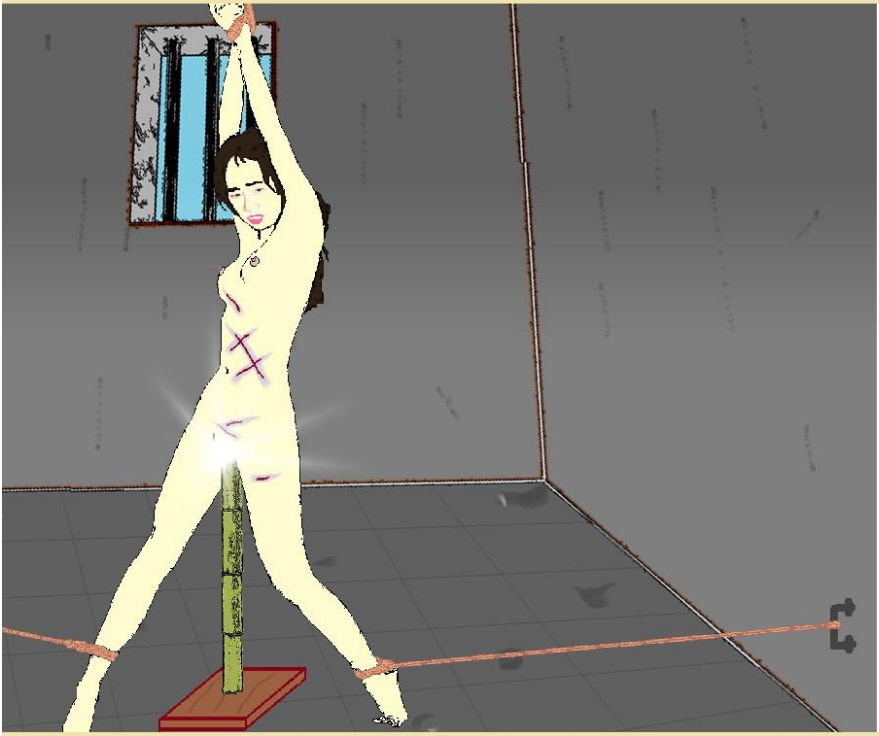
Zero Sum Short Stories
零和短編集

09

くノ半試し



くノ十責之図

濠門長恭

目次

任務失敗……二
麻煙色責……五
水責敲問……一四
側室灸責
焼鏝仕置
くノ米問
表裏反転
後書き

任務失敗

天井隅の羽目板をずらして部屋の様子を窺うと、布団の中の女主人と目が合ってしまった。八重の方が布団から小さく手を出して、手招きする。

千鳥が言いつかった務めは、八重の方の文箱から小さな包みを持ち帰るという、それだけで――内通しているとまでは聞かされていなかった。機に臨んで変に応じる力があるか、もしや試されているのではないかと、千鳥は疑った。

ちなみに、千鳥の本来の名は衞である。七歳までに基本の鍛錬を終えて、素質ありと認められた者には鳥の名が与えられる。烏、鳩、鷹、鶸、鴨、鷁、鶯などである。この物語には一文字の鳥名は終盤まで他に出て来ないが、素読が困難なので、千鳥と表記する。

七歳の春に名前を与えられて九年。千鳥の技は忍び働きが務まるまでに達していた。

しかし。

「女の徴（しるし）を見てより一年、よう頑張った。男三人を相手取って、殺されるも返り討ちも自在となれば、すでに技はくノ一の域に達しておる。されど、修羅場を踏むまでは半人前、くノ半であると肝に命じよ」

最初の修羅場として惣領直々に賜ったのが、此度の務めなのだった。

そのような想いがよぎったのは、瞬きひとつの間。千鳥は音もなく畳の上に下りて、そのまま片膝を突いた。

「包みと共に、折り鶴を持ち帰ってたもれ。妾（わらわ）の証しとなるゆえ」
千鳥はちょっと考えて、貴人への礼を尽くす必要はないと判断した。無遠慮に立ち上がって、部屋の隅に片付けられている文箱を開けた。油紙に包まれた小さな巻物があった。その横に、小指の爪よりも小さな金色の折り鶴。金箔を折ったものらしい。羽根は畳まれている。
千鳥は巻物を有明行灯にかざして封蝋を軟らかくすると、そこに折り鶴を埋め込んだ。
「失礼をお許しください」
さすがに断わってから、忍び袴をずらし女褌を緩めて――巻物を女穴に隠した。ほとんどひと呼吸のうちに、身なりを整える。
部屋の隅で片膝を突いて。
「これにて御免いたします」
言葉と同時に千鳥の姿は消えていた。
屋敷を脱けて物陰を縫い、囲い壁に達する。植込に潜り込み、鞘を半分だけ抜いて忍び刀ごと突き出し、前を探りながら這い進む。壁の小さな割れ目に達すると、その中へ身を這わそうとした。
千鳥は身の丈四尺七寸と、並の男より四寸は低い。女であれば肩幅も小さい。関節を外すような技を使わずとも、この割れ目から自在に出入り出来る。
しまった……
肩に何かが引っ掛かったのを感じて、咄嗟に三寸ほども身を引いたが、すでに遅い。鳴子の音が微かに聞こえて、押取り刀で駆け付けてくる警護衆の足音が立った。

このような仕掛、入るときには無かった筈。それとも見落としていたのだろうか。詮索しても無意味。

千鳥は物音を立てるのも構わず、割れ目に潜り込んで――堀に向かって身を投じた。

しかし。肩までが水に入ったところで、千鳥の身体は張り詰めた軟らかな感触に抱き竦められた。そのせいで、派手な水音を立ててしまう。

ぬっ……これは、なんだ。

もがけば藻掻くほど、全身に絡み付いてくる。目の詰んだ網らしい。刀で網を破ろうとしたが、刃が立たない。極細の鋼線で編まれているのか。

ざば……

千鳥の身体が水から引き揚げられて、さらに吊り上げられる。もはや、一瞬の猶予も無い。袴に手を突っ込んで巻物を取り出した。網の隙間から捨てようとして、考え直した。

このまま捨てれば、水に浮いて容易に見つかってしまうのではないか。もっとも隠し通すべきは何か。密書ではない。密書は何度でも作れるが、女忍びを側室に仕立てるのは、きわめて難しい。ならば……

千鳥は、網に絡められた手を懸命に動かして、封蝋を剥がした。金箔の折り鶴をほじくり出し、さらに小さく押し潰して網の隙間から捨てた。封蝋に残っているだろう跡形も指で潰す。

千鳥が網ごと地面に転がされたとき、密書は網の目に引っ掛かったままだった。龕灯と松明に照らし出されて、それは容易に発見され敵の手に渡ってしまった。

千鳥は網ごとぐるぐる巻きに縛られ、仕留められた獣のように棒から吊るされて、城内

の穿鑿場――分かり易くいえば拷問蔵へ運び込まれた。

麻煙色責

拷問蔵の中は、松明に囲まれていた外よりも遥かに暗かった。不覚にも両目を開けていた千鳥は、目が闇に慣れるまでは、気配でしか周囲を探れない。千鳥を囲んでいるのは三人。

若い娘と侮ってその類の責めに掛けてくるなら、この一年の修行の成果を見せてやる。まさか逃げ出せはしないまでも、向後の責問に幾らかでも手心を加えてもらえはしないだろうか。

網が開かれて、千鳥は石畳の上に転がされた。と同時にねじ伏せられ、一節ごとに切った竹に縄を通した竹轡を噛まされた。自害封じである。

そして衣服を女褌に至るまで切り裂かれ剥ぎ取られ、厳しく高手小手に縛された。さらに、片足にだけ縄を巻かれて逆さ吊りにされた。

素裸にして縛るのは縄脱けを防ぐためと千鳥も知っているから、羞ずかしいとは思わない――と、千鳥はおのれに言い聞かせた。まったく見知らぬというよりも明らかな敵に素肌を曝すのは、(常人と懸け離れた振舞をせぬよう)幼いときから植え付けられている女としての羞恥を抑えきれぬし、苛酷な拷問に掛けられるだろう恐怖も綯い混ざって、実のところ、生きた心地もないのだった。

しかし、拷問はすぐには始まらなかった。蝋燭一本の明かりが消され、明取窓も閉ざされて。三人が蔵から出て行った。千鳥は一本足で逆さ吊りにされたまま、闇の中に置き去られる。

これから、どのような拷問に掛けられるのか。我はそれに耐えられるだろうか。闇の中で恐怖が膨らむ。

千鳥は――というより山賀の女忍者は、拷問に耐える修練は積んでいない。苛酷な拷問に耐えても、上には上がある。か弱い女人であることが武器になる場合もあるが、演じていると見破られれば、かえって仇となる。

つまり。体術に優れ武技に秀で、閨技も地女の及ぶところにあらざろうと、打ち敲かれれて悲鳴をあげるのは、並の娘と変わりないのだった。それを堪える気力はあるにしても。

すでに夜も遅い。このまま朝まで捨て置かれるとすれば、それはそれで厳しい責めになる。凍鶴のように片足を折り曲げて腰に引き付けた姿で逆さに吊られて不安を募らせていた千鳥だったが、半時と経たないうちに土蔵の扉が開いて――土蔵の四隅と壁の中程にも百目蝋燭が明々と灯された。

千鳥は戸板の上に、大の字に縛り直された。戸板とは言い表わしたが、ずっと分厚く頑丈で、前後に傾けられる台に乗っている。その上に――膝を軽く折り曲げ、腰の下に丸太を挟まれての磔だった。

男を受け挿れる形そのものに固縛されて、千鳥は内心で安堵した。どれだけ嬲られ辱しめられようと、痛いよりはましに思える。

三人の男どもは、一人が明らかに下人、あとの二人は下っ端武士の風体に身をやつして

いるが、年配の男には物腰に重みがうかがえた。この場の采配を振っているその男が、千鳥を間近に見下ろす。

もう一人の若い侍が千鳥の横に膝を突いて、舌は噛めぬが意味のある言葉を吐ける程度に竹轡を緩めた。用心のために、軽く顎をつかむ。

「おまえが山賀の忍びであることは、持っておった七色文より明らかじゃ」

七色文というのは、山賀の使う隠し文の謂である。文は必ず「いろはあおし」「いろはみとり」「いろはさくら」などと『色』で始まり、幾つかの文字がその色で書かれている。ゆえに七色という。これを読み解いた者はいない。千鳥はその一端を教わっているが、読み解けるのは最初の二十文字くらいで、後は同じ読み解き方では意味を成さなくなってしまう。

「何を探っておった」

単刀直入な詰問。正体は割れているのだし、そうでなくても、大名の居城に忍び込むのは十中八九どころか百中九十九まで公儀隠密に決まっている。

「おらは、いっしょをおちだすようにいわれただけだ」

千鳥も、竹轡が許す限りにはっきりと真っ直ぐに答えた。まったくの真実だった。言葉遣いが山育ちの娘に近いのは、意図してではない。どこの国に潜っても、うっかり尻尾をつかまれないように、身分は低いがきつい訛りの無い言葉を、日頃から使うように躾けられている。

「密書は誰から受け取った」

「しらん」

声を張り過ぎないように気をつけて、しかしきっぱりと返した。
「いっしょはおくやしきのてんじょううら、にしのすいにおかえていた」
もしも天井裏を調べられたときの用心に、足跡はあちこちに付けてある。
「では、そこに密書を置いたのは誰じゃ」
「しらん。げにんはいあんことあでおしえておらえん、それくらい、しっておろうが」
忍びを取り調べるのは、忍びを知悉した者に決まっている。
「それゆえ、不思議なのじゃ。おまえは、ぺらぺら喋り過ぎる。隙あらば自害する気配も無い」
「しのいだって、いのちはおしいぞ」
それは心の底からの――怨嗟だった。ほんとうは、命が惜しいのではない。惜しまなければならないのだ。
捕らえられた忍びの先行きは定まっている。洗いざらい喋るまで、さまざまな拷問に掛けられる。あっさり白状したところで、かえって疑われて、ほんとうのことを白状しろと拷問される。そして、相手が自白を信用すれば――ようやく楽にしてもらえる。それくらいなら、捕まると直ちに自害したほうが、苦しまずに済む。たいがいの忍びは、そのようにする。ただ、山賀の衆を除けば。
忍びが自害すれば、どうなるか。敵は骸を捨てて、使える手勢すべてで他の探索に当たる。しかし忍びが生きていれば。なんとか白状させようと拷問せざるを得ない。生かしておくには食い物を与えなければならぬし、逃げぬように見張を立てねばならぬ。糞尿も垂れ流しでは、捕らえている側が閉口してしまう。つまり、世話に人手を取られる分、敵の

余力を削げる。味方が動きやすくなる。
捕らえられた者にしてみれば、生き地獄を延々と味わわねばならない。千鳥が山賀の心得を恨めしく思うのも道理であった。
筆者註：近代的な軍隊における兵士も（旧日本軍と、テロリストに類する組織を除けば）そのように教育されていた。脱走を試みるのも、少なくとも軍人魂旺盛な者にとっては、後方攪乱の意味もあったのである。ただし、この頃には戦時国際法規で、ある程度は捕虜の待遇が保証されてはいたのだが。
「そうか。命が惜しいか。ならば……生きていて良かったと、たっぷり思い知らせてくれようぞ」
千鳥の竹轡が締め直される。年輩の侍は後ろに下がって、下人が設えた床几に腰を下ろした。若い侍は二本の煙管を取り出して、刻みを詰め始めた。
「口をふさげ」
下人が水に浸けた手拭を何枚も千鳥の口にかぶせた。千鳥は鼻でしか息が出来なくなったのだが。その鼻の穴に煙管が差し込まれた。
「むうう……」
いがらっぽい煙脂の臭いが鼻の奥に突き刺さる。
小さな蝋燭を煙管の火皿に突き付けられて、千鳥は無駄な駆引きなどせずに、それでもなるたけ煙草を燃やさないように、そっと息を吸った。それでも、たちまちに噎せる。
「けふっ……ごほほほっ」
下人が手拭を押さえている手を緩め、咳が落ち着くと、また手拭を押し付ける。

二度三度と繰り返されて。
「んぶううう……」
部屋が、ぐわらんぐわらんと揺れ始めた。揺れるうちに、部屋の景色に極彩色の虹が重なっていく。
「うあああ、ちれい……」
恍惚となって、千鳥が呟く。
煙管が鼻から抜かれ、手拭が剥がされる。さらに竹轡まで外された。
千鳥の視界の中で、虹の塊が覆い被さってくる。それが若い侍だとは、千鳥にも分かっている。虹の塊から腕が伸びて……
「ひゃあっ……」
雷に打たれたような衝撃が、乳首から心の臓までを貫いた。太く甘美な衝撃だった。
さわさわと、虹が双つの乳房を這いまわる撫でる揉むこねくる。太く細く鋭く鈍く――
さざ波が大波が、乳房を揺すぶり乳首を翻弄する。
「あああっ……ひゃあっ……くううう」
くノ一の術を駆使しても得られない、凄絶な快感。千鳥は、縛り付けられている身の許す限りに全身をくねらせ、乳房を虹に押し付けた。しかし、全身に満ちていく快感は募るばかり。我知らず、千鳥は両足を突っ張って腰を突き上げていた。
「ちょうだい……於女子(おめこ)に……於男子(おのこ)をっ」
くノ一の術など忘れて、ただ女の本能に衝き動かされる千鳥。
無理からぬことではあった。千鳥が吸わされたのは、煙草ではない。大麻草の花穂の芽

を天日に干したものに麻黄を加え、さらに少量の阿片を混じてある。わずかな刺激にも性欲を掻き立てられ、そこに幻覚が加わる。

千鳥にはうねる虹に見えている若い侍が、千鳥の求めに応じて右手を下腹部へ滑らせた。周辺をつついて焦らすなどの駆引きは無用。すでに充血して顔を覗かせている突起を摘まんで、つるんと扱き上げた。

「うあああああっ……いい、いいいっ」

千鳥の腰が、鋭く跳ね上がった。下に敷かれている丸太に反動で腰骨を打ち当てたが、当然にあるはずの痛みさえ、とろけた砂糖の海で逆巻く大波に落とされた一掬の塩でしかなかった。

「もう……もう……於女子に、於女子に……ちょうだいいい」

どんな女誑(たら)しでも辟易するだろう獣欲剥き出しの浅ましい求めに、若い侍は無表情に応える。袴を脱ぎ裾を捲って絡げ、褌の前を腰紐から抜く。太い肉槍は、すでに刺突の構えになっている。

侍は戸板の上で四つん這いになって、ひと息に千鳥を貫いた。

「あああっ……太い、硬い、熱い……」

それは男を悦ばす手管ではあったが、麻煙のせいで、千鳥は心底そのように感じている。その証拠に、千鳥はいっそうの法悦を求めて腰を妖しくくねらせていた。

男はその求めにも応じて、女壺も壊れよとばかりに激しく深く肉槍を突き挿れては螻蛄(けら)首のあたりまで引き抜く。そして螻蛄首で女壺の縁をしつこくこねくってから、とどめの一撃を繰り出す。

「ひいいいっ……いいい、いい。もっと……」
たちまちに千鳥は峨々たる山脈の頂へと押し上げられていった……のだが。
侍が不意に動きを止めた。抜去して身を起こし、千鳥を見下ろす。
「あ……やめないで」
千鳥は男の身体を求めて、個縛された手足を切なそうに蠢かす。
「おまえに密書を渡したのは誰だ」
「知らない。天井裏に置いてあった」
「正直に言わねば、もうしてやらぬぞ」
「知らない知らない。誰かが置いたんだろうけど、おらは知らねえ」
女にとって、性の快楽を奪われることは死にも勝る苦痛である（とは、男である筆者の妄想であろうか）。千鳥はその苦しみに打ち克って忍びの性を貫いた。あるいは、極限の法悦の中で、真の死の恐怖に目覚めたのかもしれない。自白すれば殺されて――二度と法悦を味わえなくなるという。
侍は左手を乳首に、右手を雛先に伸ばした。柔らかく摘まみ転がして、急坂を滑り落ちようとする千鳥を押し留める。その手つきは段々と激しく乱暴になっていき、また千鳥に坂を登らせる。
そして、女壺の入口を槍先でつついて焦らす。
「仲間は誰じゃ。賄方の下女か、誰ぞの側仕えか、まさかに別式女か。名は言わずとも良い。それだけを教えてくれれば、そら……」
じんわりと肉槍を半ばまで進めて、一気に引き抜く。

「あっ……意地悪せんでくれろ。知らんものは知らんのじゃ」
「では、別のことを尋ねよう。密書を書いたのは、おまえに手渡したのと同じ者じゃな」
「違う。手渡されたんじゃない。おらはふ……」
文箱と言いかけて、危うく口を閉ざした。文箱を持つ身分の者は限られている。
「これは余程に多くの密偵が紛れ込んでおるようじゃな」
なにを見当違いなことを――嘲りが表情のどこかに現われたのだろう。
「そうか。一人だけか」
ぎくりとして、今度は身体に現われた。
「きゅうっと締まったぞ。下の口は正直じゃな」
それでは褒美をやろうと嘯いて、侍は深々と千鳥を貫き、もはや九浅一深など構わずに荒腰を遣って追い上げていき、ついに頂を極めさせた。しかし、男は漏らしていない。やや穏やかにはなったものの、さらに千鳥を追い立てる。
「待って……もうじゅうぶん。やめて、休ませて」
事後の余韻に漂ってこそ、深い愉悦を全身に沁み渡らせられるという女の性に、頂から追い立てられるのはつらい。
「言えば楽になるぞ。仲間の名を言え」
「やめろやめろ。やめてくれんけりゃ舌を噛むぞ」
言い終わらぬうちに、口を濡れ手拭でふさがれ、鼻に煙管を突っ込まれる。部屋の揺れが激しくなり、濃密な虹が目をふさぐ。
懇願も哀訴も無視されて、肉槍に突き上げられて尾根を走らされるうちに、より高い頂

が見えてくる。
「ひいい……こんな……うあああ、いいいいっ」
「言え。別式目の楓か、賄方のお仙、お満、それとも小夜の方の侍女の誰かか」
「うあああ、いいいい。もっと、もっとおおお」
千鳥は頭の片隅に残っている正気を振り絞って、くノ一の術でみずからを法悦の極北にまで押し上げた。女壺が立て続けに痙攣する。こうなれば、当てずっぽうに八重の方の名を出されても、その驚きのひくつきとは区別できまい。
果たして。若い侍はチッと舌打ちして、千鳥から下りた。
「あああっ……」
千鳥の恨みがましい悲鳴が拷問蔵に響いた。
「年端もいかぬというに強かな忍びでござる」
「女哭かせの剛直(たけなお)でも落とせぬか。となれば強問(しいどい)しかあるまいて」
「柴里(しばさと)殿の本領発揮でござるな」
千鳥は縄を解かれて戸板から引きずり下ろされた。千鳥への色責は終わったのだった。

水責敲問

そして直ちに、苛酷な拷問が始まる。
千鳥は後ろ手に捩じ上げられて手首を縛られたが、縄尻は首に巻かれた。すでに元結も

ほどけている髪は束ねられて、一貫目はあろうかという石に結び付けられた。天井の滑車から垂れる太い縄が右足首に巻き付けられて――千鳥はまたしても片足で逆さ吊りにされた。

千鳥は身体が振り子のように大きく揺れているように感じたが、それが怪しい煙草のせいだろうとも感付いている。

「命を惜しむとはいえ、死にたくなるほどの甚振りに掛けてくれるからな」

吊り上げられた千鳥の真下に、水を湛えた大きな桶が置かれた。

水責と察して、千鳥は深呼吸を繰り返す。そうすれば、ただ息を吸って止めるよりも長く水に潜っていられる。とはいえ水責は、責められている者が強情であれば溺れ死ぬ寸前まで続けられるのが常であるから、苦しみが長引くだけではあるのだが。

「仲間の名を言えば、引き上げてやるぞ」

水の中で言葉を発しても泡になるだけなのだから、これは言葉で嬲っているに等しい。

「知らん。ほんとうに知らんのじゃ」

千鳥もまた、無駄な返事をして息を余分に遣う。やはり、麻煙がまだ効いている。

年輩の侍が小さく手を振ると、千鳥を吊っている縄が緩められて――千鳥の裸身は臍のあたりまで水中に没した。

外の気配もろくに伝わってこない水中で、千鳥は息を止めて、引き上げられるのを待つことしかできない。泡を吐いてわざと痙攣して、溺れた振りをしようかとも考えたが、試みはしなかった。それで引き上げてもらえるとは限らない。川底に沈んで半刻も経った子供が、口移しで息を吹き込まれ拳で背中から心の臓を叩かれて、蘇生した例を千鳥は知っ

ている。それくらい、この連中も心得ているだろう。

筆者註：ここでいう半刻は大雑把に五分乃至十分を意味する。古くから天文学者などは、一日を百分割して一刻と数える百刻法を使ってきた。即ち、この数え方による一刻は十四分二十四秒である。庶民も「刻一刻」「一刻を争う」などというふうに使っている。日出から日没までを六分割する不定時法については、筆者は極力「一時」などと表わすようにしている。

しかし、柴里と呼ばれた年輩の侍は、そんなに悠長ではなかった。

びしいっ……尻に鋭い痛みが奔って、千鳥は口から大きく泡を吹いた。水中でなければ悲鳴になっていただろう。

びしいっ、びしいっ。鞭や棒ではない、鋭く食い込んでくる激痛。刃引きで斬られたときの衝撃にも似ていた。あるいは峰打ちか。

麻煙と色責の余韻が残っていたから、不意を衝かれて悲鳴を上げたものの、本来ならば打ち敲かれたくらいで悲鳴を上げる千鳥ではない。二発目からは息を詰めて耐えた。しかし。

ずしんと股間を打たれて、さすがに絶叫してしまった。身体を真っ二つに割られたような衝撃痛。折り曲げていた左足をいっそう腰に引きつけてきつく閉じ合わせ、二発目を阻もうとした。

ざばあっと引き上げられて、しかし乳房が水面に出たところで止められた。

びしいっ、びしいっ、びしいっ……立て続けに乳房を打たれた。防ぎようがない。胸を強く圧迫されるせいもあって、千鳥は重ねて泡を吹きこぼす。

ごぼっと水を吸い込んで、激しく噎せた。喉が灼けるように熱い。水中で咳き込みなが

ら、千鳥の裸身が激しく痙攣する。
さらに引き上げられた。
「ぶはあっ……」
千鳥は大きく口を開けて……息を吸えなかった。息を吐けば、泡ではなく激しく飛沫を吹き飛ばす。しかし吸えば、ほとんどが水だった。
千鳥は身体をくの字に曲げて顎を引き付け、すこしでも顔を水の上に出そうとあがいた。しかし、髪に縛り付けられた石が頭を引き戻し、首に巻かれた縄が呼吸を妨げる。
「くっ……」
渾身の力でいっそう上体を起こそうとしたが、桶の側板に突き当たってしまう。それでも、左足を伸ばして後ろへ投げ出して、わずかでも身体を起こす。
柴里が小刀を振りかざしているのが、ちらっと見えた。粗末な拵え。腰に佩いていた脇差ではないと、忍びの目は咄嗟に見て取った。
「げふふっ……はあ、はあ、はあ……あぶふっ」
大きく口を開いて、どうにか息を貪っていると――足を吊っている縄を緩められて、水中に叩き込まれた。
ずしんと、股間に衝撃。せっかく吸った息のほとんどが泡となってしまった。
また、わずかに引き上げられて。
ずぶうっ……小刀の柄だろうか。腹に突き入れられて、鈍く重たい痛みが膨れ上がった。胃の腑から苦い塊が込み上げてくる。逆さに吊られているので、たちまちに口まで下がって、千鳥は水の中に水を吐いた。

息を止める分別も消し飛んで、大量に水を吸い込み、断末魔にのたうつ。
ざばあっ……今度こそ、完全に引き上げられたと、髪に痛みが奔って確信できた。
横に押されて床に下ろされ、仰向けに転がされて――どすんと、腹を踏み付けられた。
「うべへっ……」
手妻の水芸さながらに、千鳥は口から水を噴き上げた。腹をぐりぐりと踏み躙られ、それでも水を吐かなくなると俯せにされて、どすんどすんと背中を踏み付けられる。
「ぎひいっ……」
みしっと肋骨が軋んだ。
「元は山の民だけあって、水練はからきしのようじゃな」
祖先がというよりも、今も農民である伊賀や甲賀の者たちと違って、山賀の衆は今でこそひとつ地に住まってはいるが、祖先を辿れば山窩に行き着く。といって、水練や水遁の術で他衆に後れを取ることはないのだが。
「どうあっても、仲間を売るつもりは無いようじゃな」
分かりきったことを言う。この男も忍びにしては口数が多過ぎると、千鳥は思った。責問の方便かもしれないと、それに思い至るくらいには、千鳥も正気を取り戻しているというか、水責にも屈していないというべきか。
「では、別のことを尋ねてみよう。これに見覚えはあるか」
柴里が小さな巻物を広げて、千鳥の目の前にかざした。
見覚えは、無い。けれど、それが千鳥に託された密書か、あるいはその写しであることは自明だった。

確かに。柴里が言ったとおりに、山賀の七色文だった。

イロハアカネヤエワタアルマトホオケヰキヘユトツマニマルセエメマ
ウスキフミニミラチスイシヲチタフセセテシロレサナテウラオワノリ
ナレノオモヒエスフエヰメニレツネレソワニマロセフヌリヲオヲワユ
スカシミユルラツチカヘロイヤコチユノイラユミネルフクルユヒトイ

暗号でよくあるのが、別の文字に置き換えるやり方である。たとえばイロハニホヘトをアイウエオに置き換えるなどだ。しかしこれは、換字表が敵の手に渡れば容易に解読されるし、だからといって表を替えようにも、遠隔の地にいる味方に新しい換字表を送る途中で奪われたらおしまいである。

また、じゅうぶんに文書が長いか、幾つかの暗号書を集められると。出現頻度の高い文字を手掛かりに解読される恐れもある。

ここで、ミステリー好きの読者のために空白を設けます。

自力で解読してみませんか。

時代劇に登場する暗号ですから、コンピューターがないと解けないような暗号ではありません。

拷問がモチーフでありテーマでありプロットでもある小説ですから、暗号は味付けに過ぎません。次のページからは、すぐに種明かしが始まります。

この二つの欠陥を補うのが、山賀の七色文だった。七色文では、最初の六文字が換字表になっている。イ→ア、ロ→カ、ハ→ネ。しかも、平文と暗号とが一対一対応ではない。イ→アは、イロハを三十五文字ずらしてある。二文字目は十二文字、三文字目は十七文字。そして、四文字目はまた三十五文字、五文字目は十二文字……と、イロハ四十八文字をずらしていくのである。煩雑ではあるが、解読される恐れは小さくなる。さらに、目晦ましとして濁音を、「色は茜」なのだから茜色にしてある。七色文を入手した敵は、たいてい色違いの文字に謎を解く鍵を見い出そうとして、ますます間違った道に迷い込んでしまう。

イロハを順逆ともに諳んじている千鳥は、拷問で痛めつけられていてもなお、すらすらと七色文を読み解けた。

シラビャウシエエアメツチハシラネドワレゾシルラムエアタヰヒヌユ……

白拍子というのは、八重の秘密名だろう。「エ」は区切りに使う。しかし。「天地は知らねど我ぞ知るらむ」とは、何を伝えようとしているのか。まして、「あたいひぬゆ」とは。途中から意味を為さなくなってくるのも、まさしく七色文なのだが。

習い性というべきか。敵に捕らえられ拷問に掛けられているさなかにも、千鳥は七色文に目を凝らしていた。そして、とんでもないことに気づいてしまった。

この七色文はおかしい。本来であれば、七色文は一行に二十、二十五、三十文字で並べる。

イロハアカネヤエワタアルマトホオケヰキヘユトツマニ
マルセエメマウスキフミニミラチスイシヲチタフセセテ
シロレサナテウラオワノリナレノオモヒエスフエヰメニ

レツネレソワニマロセフヌリヲオヲワユスカシミユルラ
ツチカヘロイヤコチユノイラユミネルフクルユヒトイ

それが、この文は……和歌と同じ三十一文字（みそひともじ）になっている。そして。イロハアカネの隣の六文字がウスキフミニ、その三行目はナレノオモヒ、そして最後はスカシミユル。「薄き文に汝れの想い透かし見ゆる」偶然に並んだ文字ではないだろう。とすると……

「ああっ……」

八重の迂闊さを詰ってか、七色文の真の読み解き方をみずからの才覚で見つけた喜びか。千鳥は忍びにもあるまじく、おのれの心の揺らぎを、そのまま口に出していた。さすがに、すぐ気づいて口を閉じたが、遅かった。

「んん……余程のことが書いてあるようじゃな」

「違う……」

咄嗟に否定して、もっともらしい言い訳を必死に考える。

「おらは、ちらっと密書を見ておる。それとこれとは、まるきり別物じゃ」

柴里が薄く嗤った。

「なるほど。そこまでシラを切ってでも守りたい秘密か」

ふたたび、千鳥は吊り上げられた。

「案ずるな。おまえは大切な生き証人じゃ。溺れ死なせはせぬ」

石が桶の底に着き、その上に頭が乗るまで、深く沈められた。左の足首にも縄が巻かれて横に引っ張られて、千鳥は開脚を強いられた。

「……」

股間をぞろりと撫で上げられて、その手付きから今度の責手は剛直という若い侍だと知った。水責で苦しませながら、同時に女の最も弱い部分を責める。相反する責めに、我はどうなるのだろうかと――千鳥には想像もつかない。

縮こまっている雛先を摘まれ、かむっている皮を剥き暴かれて。それだけで、腰から背骨に掛けて、おぞましい快感が波打った。麻煙に侵されていない分、嫌悪が先に立つ。

それでも。敵の思う通りになってたまるかと、出来るだけ気を逸らそうとした。

七色文は三十一文字ずつで読み解き方を変えるのだ。もしも一行が三十一文字ではなくて限(き)りの好い文字数で区切ってあって、鍵になる六文字も意味の無い言葉だったら、途中で鍵を変えるなんて気づかなかったろう。教えられずに自力で見つけたことが、とにかく誇らしかった嬉しかった。

七色文の二行目は覚えている。

ウスキフミニミラチスイシヲチタフセセテシロレサナテウラオワノリ

ウがフだから八文字、スがミで四十二文字というよりも六文字戻し……

ミラチから始まる文の元の意味は……コクシユトクニガロウニフオンアリエトオマチヅツヲイ

読み解いてはいけない。そのことに気づいた。国主と国家老。そして、トオマチヅツというのは遠町筒、銃身が普通の種子島よりずっと長い鉄砲のことだ。百町どころか二百町先の人間を狙い撃ちできる。そんな物騒な物と、この国の政(まつりごと)を取り仕切る者と。この文を読み解いてしまえば……ますます白状してはいけない秘密を抱え込むだけだ。

そうか。最初の一行も目晦ましなんだ。千鳥は七色文から考えを逸らそうとして、また

そこへ戻ってしまう。

修行中の千鳥にさえ明かしてもらった七色文の一端。最初の部分を自力で読み解く者がいないとは限らない。だから、意味の無い文を書いておいて、真の文は解き方を変えてから書く。きっとそうだ。

筆者註：第二次大戦中のアメリカ軍の暗号が、まさにこれであった。有名な「第34任務部隊は何処にありや。全世界は知らんと欲す」の最後の一節は皮肉などではなく、敵の解読努力を撹乱するために付け加えた、有名な歌からの引用である。あまりに適切な文言ではあるが……

さいわいにというか。それ以上は七色文のこと（も何もかも）を考えられなくなった。

千鳥の願いに反して、実核（さね）は充血して、ずきずきと脈拍っている。そこを、触れるか触れないかの柔らかさで擦られ、あるいは強く摘まれて――まだそれほど息が苦しくないことも相俟って、千鳥はゆるゆると官能の坂を押し上げられていったのだが。

「……」

肉槍も太く硬い感触に於女子を貫かれて、千鳥はまた命の息を吐き出してしまった。太いというよりも幅が広い。さっき突っ込まれた物と同じだ。やはり、刃引きの小刀の鞘だろうかと――見当をつけたところで意味は無いのだが。

鞘は人並みの於男子では届かない奥深くまでも抉ってくる。荒腰でも追いつかないほどの速さで抽挿が繰り返される。快感は、むしろ遠ざかって――内臓を掻き回されているような不快が募ってくる。息も急速に苦しくなってくる。

溺れ死なせはしないなどと言っていたけれど。引き上げられる気配は、まったく無かった。蝋燭の灯が水面にきらきらと反射しているのだが、それがぼんやりとにじんできて、

次第に暗くなっていく。そして、視界の端が赤く翳ってきて、頭が鈍く痛む。
たちまち苦しむだけと分かっていても、大きく息を吸い込みたい誘惑が、じわじわと千鳥を蝕む。
なんとか顔を上げられないかと、残された力を絞り出すようにして上体を曲げた。頭が側板に突き当たって、腰も反対側に触れる。腰をもうすこし上げられれば……縄に引かれたまま足を前後に蹴って……
ばかっと、衝撃があって。ざああっと水が流れ去った。火事場の馬鹿力とでもいうか、上半身そのものが楔となって、桶を壊したのだった。
「げふっ……ぶふうう、ごふっ……」
咳き込みながら、竜吐水さながらに水を吐いて。はあはあはあと、息を貪る千鳥。
「呆れたものじゃな」
「この桶もずいぶんと古びていましたから、致し方無きことかと」
まだ咳き込んでいる千鳥をほったらかして、剛直と下人が桶の跡始末をする。流れ出た大量の水は石畳の上を流れて、床の一隅にある穴へ吸い込まれていった。
「もはや寅の刻も近い。夜を徹しては、こちらが堪らぬ。強問は明日に致すか」
とは、責める側のこと。千鳥には、さらに苛酷な拷問が待っていた。
差し渡しが二尺はあろうかという丸太が、拷問蔵の真ん中に立てられた。高さは四尺余。生半なことでは倒れぬように、三角の脚が四方に張り出している。
千鳥はあらためて厳重に縛り直された。高手小手に緊縛した縄尻は乳房の上下をきつく巻き締める。そうして、腋の下に吊り縄が通されて――千鳥は丸太の上に吊るされた。

丸太に向かって、じりじりと下ろされていく。千鳥は丸太の先に目を据えて、息を飲んでいる。丸太の上に座るなど出来ない相談だった。丸太は途中から先細りに削られていて、先端は錐のように尖っているのだ。

柴里が千鳥の後に立って、膝をつかんで脚を左右に割り開く。丸太に脚を割られながら、千鳥の身体がじりじりと下がっていく。

すでに、この責めが如何なるものか、千鳥は悟っている。みずからの重みで串刺しにされるのだ。水責の大桶が古びていたと同じに、この責具も木肌がくすんでいる。そして、どすぐろい血の痕に汚れている。いったいに、何人がこの責めに掛けられたのだろうか。

「男ならば迷うこともないが、女とあってはどうしたものか」

男も同じようにされるのかと、それはそれで、千鳥は戦慄した。

いよいよ丸太の先端が股間に達して。千鳥は脚を曲げて、急な斜面になっている丸太の表面を足の裏で挟んだ。わずかに身体の重みを支えられるが、ずるずると滑っていく。

「座る当人に決めさせてやるかな」

柴里が、膝をつかんでいる手を放した。足がずるっと滑って、千鳥は咄嗟に腰を引いていた。肛門を貫かれるよりはと、判断したのだった。

ぐさりと、丸太の尖った先端が淫裂に突き刺さった。

「ぎひいいいっ……」

渾身の力で踏ん張って、身体を支えようとする。それでも丸太は、ぎちぎちと膣口を抉じ開けて一寸刻みに突き刺さってくる。

「くううう……」

先の尖った一本棒なら、一気に女壺を突き抜けていただろう。しかし、膣口は二尺どころか一尺の太さすら受け挿れるのは不可能だ。ずたずたに引き裂かれてしまう。逆に考えれば、じゅうぶんに膣まわりの筋肉が強靭なら、丸太の貫通を阻止できるはずだ。

この責めの目的は処刑ではない。長時間にわたって苦しめるために、削る角度はじゅうぶんに吟味されている。

千鳥は腿をすぼめ足首を伸ばしながら踏ん張るという芸当に挑み、穴も必死に引き締めて――どうにか串刺しを免れている。もちろん、今にも張り裂けんばかりの激痛に苛まれながら。

「うぐうう……んんん……」

呻き声が絶えない。たちまちに、全身が脂汗に絖る。

剛直が縄を軽く引いてから、わずかに弛ませて、縄尻を壁の金具に結び留めた。さらに千鳥の身体がずり落ちても、丸太の先端が子袋を突き破ったあたりで縄が張り詰めて――命までは奪わないだろう。手遅れにならぬうちに、裂けた淫裂の手当をしてやり、血止めをしてやれば、ではあるが。

しかし、巨大な楔に女芯を抉られている千鳥には、そこまでは見抜けない。いや、そうだと知らされたところで、イチかバチかに賭けて脚の力を緩めることなど出来っこない。

「ぬううう……ぐうう……ひいいい」

野太く呻きながら力み、股間を引き裂かれる激痛にか細い悲鳴をあげ続ける千鳥をその場に残して、三人の男たちは拷問蔵から出て行った。

わざと灯されたままにしてある百目蝋燭の明りに肌を濡らしながら、千鳥は命絶えるま

で終わらぬとしか思えぬ責めに苦しみ続けるのだった。